



Title	<文献紹介> エティエンヌ・バンブネ著 『自然と人間性 メルロ= ポンティの著作における人間学的な問題』 Étienne Bimbenet : Nature et humanité. Le problème anthropologique dans l' oeuvre de Merleau-Ponty, Paris, Vrin, 2004.
Author(s)	川崎, 唯史
Citation	メタフシカ. 2014, 45, p. 169-174
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/51526
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

《文献紹介》

エティエンヌ・バンブネ著

『自然と人間性 メルロ＝ポンティの著作における人間学的な問題』

Étienne Bimbenet: *Nature et humanité. Le problème anthropologique dans l'œuvre de Merleau-Ponty*, Paris, Vrin, 2004.

川崎唯史

著者紹介

エティエンヌ・バンブネは高等師範学校出身の哲学者で、2014年現在はリヨン第三大学哲学部助教授の職にあると同時に、パリのフッサール文庫のメンバーでもある。本稿で紹介する『自然と人間性』（以下「本書」と呼ぶ）に加えて、すでに『メルロ＝ポンティの後で ある思考の多産性についての研究』（*Après Merleau-Ponty. Études sur la fécondité d'une pensée*, Paris, Vrin, 2011.）と『もはや動物ではない私』（*L'animal que je ne suis plus*, Paris, Gallimard, 2011.）の二書を発表している。前者はフランス内外の学術雑誌や学会で発表された十の論文を集めたものであり、フーコー、デリダ、レヴィ＝ストロース、リクールといったフランス現代思想の面々からブルデューやマクダウェル、さらには近年の神経科学まで取り上げながら、それらをメルロ＝ポンティ的な思考と突き合わせており、メルロ＝ポンティ研究者の枠に収まらない著者の博識と力量を感じさせる。次いで出版された後者は、タイトルからしてデリダの動物論『動物を追う、ゆえに私は（動物で）ある』（Jacques Derrida, *L'animal que donc je suis*, Paris, Galilée, 2006.）の向こうを張る一書であり、いわゆる大陸哲学だけでなく分析哲学や最新の人間科学の文献をも渉猟しつつ、動物に関する哲学的問題を考察している。この著作は日本でも金森修によっていち早く紹介されており、「二十世紀の多様な〈動物の哲学〉を十全に咀嚼・吸収し、独自の現代的段階にまで到達した優れた貢献の一つ」と高く評価されている¹。2009年にはエラスムス・ムンドゥス「ユーロ・

¹ 金森修『動物に魂はあるのか 生命を見つめる哲学』、中公新書、2012年、205頁。

フィロソフィー」の派遣教員として来日しており、東京大学と大阪大学で講演を行っている²。フランス哲学界で注目される若手哲学者の一人だと言えるだろう。

本書の位置

バンブネは『メルロ＝ポンティの後で』の序文を「私たちはこれから、もはやメルロ＝ポンティについてではなく、彼とともに考えなければならない」と結んでいるが³、「もはや」という言葉が示唆するように、この著作に先立つ本書『自然と人間性』はまさしくメルロ＝ポンティについての研究である。このことは、フランスにおけるメルロ＝ポンティ研究の権威であるルノー・バルバラスに本書が捧げられていることにも見て取れる。

とはいえ本書は、そのバルバラスの『現象の存在について』(Renaud Barbaras, *De l'être du phénomène. Sur l'ontologie de Merleau-Ponty*, Grenoble, Millon, 1991.) が強力に推し進めた〈知覚の現象学から肉の存在論へ〉という読み筋を無難になぞる研究ではけっしてない。というのも本書の主題は、現象学か存在論かという方法論でもなければ、知覚や肉といったメルロ＝ポンティの有名な概念でもなく、自然と人間という人間学的な問題に置かれているからである。それに対応して、前期では『知覚の現象学』だけでなく『行動の構造』、後期では『見えるものと見えないもの』などに劣らず講義録『自然』といったテキストが取り上げられている。

なお、日本では加國尚志が同じく『行動の構造』と『自然』に焦点を絞った研究を本書よりも早く発表しているが、両書は二つの点で性格を異にする。第一に、加國が「著作の提示している問題性のありかを、その著作から、他の著作や、他の著者に「線を引く」ことによって示そうとする問題史的解釈者」という態度を取り、フッサール、シェリング、ホワイトヘッドらとメルロ＝ポンティを結びつけるのに対して、本書でのバンブネはむしろメルロ＝ポンティのテキストに限定して、「文献学的正確さを重視し、著作の文意の正確な解釈を旨とするアカデミックな解釈者」として振舞っていると言える⁴——ただし、いやそれゆえにこそ、本書にはメルロ＝ポンティが読んでいた哲学・人間科学・精神分析等の文献への丁寧な参照や、当時の知的文脈に関する注記が盛り込まれているが。第二に、加國が「対象的な自然概念を越えて根源的な自然が問題化される側面を明らかにしようという意図」の下にメルロ＝ポンティを自然哲学の系譜に位置づけたのに対して⁵、バンブネは「人間」という現象がどのようにメルロ＝ポンティの思考において問いに付され、新たな光を投げかけられるのかを把握するためにこそ、十分な紙幅を割いて自然の問題をも論じている。とはいえ、これらの差異は加國の研究に対する本書の優位を意味しない。むしろ、両書は相互補完的に『行動の構造』や『自然』に関する読者の理解を深めてくれる。併読されたい。

² 東京での講演については千葉雅也が報告している (<http://utcp.c.u-tokyo.ac.jp/blog/2009/05/report-nature-et-humanitechez/>)。大阪での講演は翻訳されている。エティエンヌ・バンブネ「「人間は理性的動物ではない」メルロ＝ポンティと人間学的差異の問題」、小林卓也訳、『年報人間科学』第31号、49-64頁。

³ *Après Merleau-Ponty*, p. 14. 強調原文。

⁴ 加國尚志『自然の現象学』、晃洋書房、2002年、iv頁。

⁵ 同上、v頁。

本書の概要

前置きはここまでにして内容に入ろう。本書は緒論に続く三つの章と結論から構成されている。まず緒論で本書の主題が問題史的な文脈とともに提示される。第一章と第二章は対をなしており、前期メルロ＝ポンティの著作である『行動の構造』と『知覚の現象学』の詳細な読解を通して、第一章では人間の問題、第二章では自然の問題がそれぞれ考察された上で、前期思想の問題点が指摘される。これを受けて第三章では『自然』講義を中心に、『世界の散文』、『シーニュ』、『見えるものと見えないもの』など中・後期のテキストの検討を通して、人間の問題がいかに語られ、あるいは語られなくなるのかが論じられる。結論ではいわゆる「人間の死」の思想との結びつきとともに本書の議論がまとめられる。以下でより詳しく見ていくが、私の関心に従って最初の二章に比重を置いて紹介することをお断りしておく。

緒論「人間は音もなく入ってきた」の冒頭で確認されるのは、メルロ＝ポンティが人間なる現象に驚いていたということである。彼にとって人間とは、十分に解明され規定されたものでもない。それゆえ人間は、新たな定義を与えられるのではなく、一つの問題として、人間的なものの境界線上で考えられることになる。そして本書は、人間の驚くべき不思議として受肉あるいは心身合一を挙げるのだが、同時にこの問題がメルロ＝ポンティに対して単なる心身問題以上の複雑さを帯びて現れていたことも強調する。このことを表現するのが「悪化したデカルト主義」(p.13)である。そこで問題になるのは、思惟と延長という実体間の関係ではなく、観念論と実在論という異なる観点の関係である。哲学に見出される観念論的・知性主義的な観点は、思考が一切の経験において自己自身への透明な現前をもつという疑いえない事実から出発する。他方、実証的な科学における実在論的な観点では、人間は心理学的・社会的・歴史学的な決定論によって説明される。各観点は全面的であり、またそれぞれの水準ではまったく正当であるため、両者は根本的に調停不可能であるように見える。バンブネはこの二律背反とその対処がメルロ＝ポンティと同時代の心理学や精神分析にも自己批判という形で現れていたことを指摘し、これを「知の動揺」と名指す(p.16)。人間科学はその本性からして、科学的に対象化しようとする当のものがその科学を行う主体であるという逆説を避けることができない。こうした動向を知的背景として登場したメルロ＝ポンティは、どちらかの観点にも与することなく、人間科学の動揺に寄り添い、驚きによって応答しながら、二つの観点の抗争を調整し解決するという任務を引き受けた。続く諸章は、メルロ＝ポンティの歩みにおいて、この任務がいかに遂行されたかを明るみに出すことになる。

第一章「人間的秩序」では、人間という現象をめぐる前期メルロ＝ポンティの思考が『行動の構造』と『知覚の現象学』に即して跡づけられるが、章の冒頭ではまず両書の方法が考察の対象となる。よく知られているように、前者は「外的傍観者」の視点を採用し、後者は反省という内的な視点から記述を遂行する。しかしバンブネによれば、この差異は前述した観念論と実在論の対立を繰り返すものではない。両書は対照的な見方から出発するが、反対の視点に向かって深まっていき、この対立が失効する地点に到達する。すなわち、『行動の構造』が実在論から意識の視点へとまたぎ越しつつ、自然主義のもつ一面の真理を超越論的哲学に書き込む一方で、『知覚

の現象学』は意識の視点から出発して、身体の自然な力にこれを従属させるに至る。見かけ上の対立に反して、両書はともにバンブネのいう「考古学的な要求」に従っており、意識と自然の合流する地点に人間という現象を位置づけるのである (p.47)。

続く諸節では「構造」、「形態」、「実存」、「両義性」といったキータームに着目して検討が進められるが、とりわけ重要視されるのは「カテゴリー的態度」の概念である。本書でも手際よく紹介されているように、これはジャクソンやゴルトシュタインといった神経科学者の議論において登場し、カッシーラーも注目した概念であり、複数の事物や概念を一つのカテゴリーの下にまとめて捉える機能を指す (pp.63-66)。この能力の先触れは動物の行動にも見られるが、それが十分に発揮されるのは人間においてである (pp.68-73)。『行動の構造』のメルロ＝ポンティはこれを人間に特徴的な能力とみなして、知覚と運動の二側面におけるカテゴリー的態度を考察している。それは、一方で知覚においては、ある事物を複数の視点から見ながら、同じものについての視覚としてまとめる能力、すなわち知覚のパースペクティヴ性である。他方で運動においては、オルガン奏者が楽譜にも演奏にも同一の楽曲を認める例に見られるように、相異なる現象において同じ客観的な本質の核をそれとして看取り、様々な状況において行動を変化させつつこの核を目指すこと、つまり客観化と行動の変化可能性である。バンブネによれば、こうしたカテゴリー的態度は「労働」にその範例を見出せる (pp.77-80)。事物を道具や文化的対象へと加工するとき、人間は異なる機能の観点から対象を捉え、新たな環境においてこれを用いるからである。

さらに第一章の最終節は、『知覚の現象学』におけるカテゴリー的態度の実存的な再解釈について、知覚・運動・言語の側面から検討している。取り上げられるのは有名なシュナイダー症例であるため委細は省くが、バンブネがそこで強調するのは、カテゴリー的態度がいかに自然とつながっているのかについて、この著作では前著よりも主知主義的でない考えが示されているということである。というのもメルロ＝ポンティは、永遠の意識の力という形ではなく、身体という所与が実存の運動によって意識に統合され利用されることを通して生じた機能として、カテゴリー的態度を捉え返しているからである。このようにバンブネは、カテゴリー的態度に着目しつつ、精神の受肉の運動と生き生きした身体の精神化という二重の現象を見出す。次章の主題となるのは、こうした視角から人間という現象の基礎として見出される「原本的な自然」なるものが、前期メルロ＝ポンティにおいてどのように論じられたかという問題である。

ところが、第二章「原本的な自然」においてバンブネが検討するのは、身体として与えられた自然ではなく、身体と世界の「共自然性」である (p.173、この点については後述する)。その実態は「生命的ナルシズム」と名指される。行為における周囲の環境への実践的な関心や、知覚における世界と身体の内的な交流などその現れは多様であるが、「生が会おうのはいつも生そのものである」と要約できる (p.181)。バンブネは『行動の構造』の「生命的秩序」に関する議論から『知覚の現象学』での「人間学的空間」の記述へとナルシズムの線を引くことによって、人間の生は自己を映し出す限りの世界しか経験できないという意味での「自己への絶対的な密着」 (p.190)、あるいは「生きることの深く決定的な偏向性」 (p.192) を際立たせている。

その上で、「精神の不可能な生」と題された第二章の最終節では、意識の自然的な由来として

提示された生命的ナルシシズムと、意識の力能であるカテゴリー的態度との間に、架橋しがたい隔たりが指摘される。前者は環境への主観的な関心と集中による自己自身への閉じ込めであるのに対して、後者はそこから自己を脱中心化して環境を客観化する機能である。バンブネによれば、メルロ＝ポンティは後者がいかに自然の方から生じてくるかを論じておらず、むしろその存在を前提している。こうして意識の自然的な根の解明が不十分であること、そして自然に対する意識の優位が残っていることが批判され、議論はその後の思考へと持ち越される。

とはいえ、第三章「自然的な生産性」は直ちに自然の問題に向かうわけではない。まず、人間学的な主題が消え去ったかに見える後期のテキスト上においても、人間なるものは「どこにもありどこにもない」こと、すなわち常にメルロ＝ポンティの念頭にあった問題でありながら、反省が外にあふれ出ているために主題としては扱われないことが示される（p.222）。その上でバンブネは、考古学的に下降する仕方、言語、感性的なもの、自然の順に考察を進め、各局面で人間が脱中心化される様子の子細に論じていく。前期ではカテゴリー的態度の全能性として残っていた意識の優位も、そこで揺らぎ、解体されていく。

結論「人間の死」では、フーコーらの思考へ接続しながら、メルロ＝ポンティにとって人間が既知の所与ではなく未決の問題であったことが再確認される。とはいえ、メルロ＝ポンティは構造主義のように超越論的主観性をただ解体して人間の死を宣告したわけではない。彼はむしろ問題の奥深くまで入り込み、内側からのり越えようとした。その試みを駆動した「驚きという哲学的な情念」を目覚めさせねばならないと述べて、バンブネは本書を結んでいる（p.315）。

おわりに——除外された論点

以上で見てきたように、本書は深く鋭い読みに基づいて複数の議論の線を混乱なく走らせることで明確な読解を提示するとともに、全体としては人間と自然という主題に集中した見事な研究になっている。それゆえ、本書の内容に異を唱えるには周到な準備と相当の紙幅が必要である。以下ではその代わりに、本書の主題にとって重要であるにもかかわらず除外されている論点を二つ挙げておきたい。

まず、誕生の問題について。バンブネの『知覚の現象学』読解は綿密かつ正確なものであるが、同時に偏っている。第三部（より正確には「コギト」と「時間性」の二章）における人間の問題はまったく検討されていないと言わざるをえない。そのため、そこで駆使される「思考する自然」、「非人間的な地」、「生の連関」といった諸概念、そしてこれらの構成する「誕生」の問題圏が見落とされている。人間の自然的な由来を問題とする本書において、誕生という出来事が注目されないことは不思議でさえある。誕生においてこそ、主体が自然の中へ投げ込まれていること、そして主体性そのもののうちに自然が透かし見えることが問題となるからである。もちろん、『知覚の現象学』第二部での議論が世界と身体の共自然性に力点を置いている以上、そちらへの着目を論難することはできない。しかし、第三部が主体性の解明を任とする限り、表立った仕方ではないにせよ、そこに人間の問題を見出すことは難しくない。それどころか、誕生をめぐる議論はカテゴリー的態度の概念と内的に関連づけることさえ可能である。本書は第二章の結びにおいて、

『知覚の現象学』の時点では精神が支配力を保っており、自然の力がまだ効力を得ていないと批判しているが (p.204)、意識と自然の関係を標示する誕生の問題を考察することなく、そのような判定を下していいものだろうか。後期著作の検討を始めるにあたり前期著作の限界を示すことはもちろん重要であるが、後者を過小評価していないかどうかの点検を欠くべきではないだろう。

次に、ヒューマニズムの概念について。これも検討するテキストの選択に関わる。本書で主に取り上げられるのはもちろん『行動の構造』、『知覚の現象学』、そして『自然』講義であるが、ソルボンヌでの講義や『世界の散文』といったテキストも言語や精神分析に関する節で立ち入って検討されており、本書の議論に奥行きを与えている。しかし他方で、『ヒューマニズムとテロル』と『弁証法の冒険』への参照は一切なく、『意味と無意味』や『シーニュ』に収められた政治についての議論も考慮の外に置かれている。もちろん、こうした文章において自然と人間の関係が論じられているわけではない以上、この限定は当然のものとも言えよう。けれども、メルロ＝ポンティがこれらのテキストにおいてこそ「ヒューマニズム」そして「人間」の語に重い意味を与えているという点は否定しがたい。バンブネは本書の緒論で「メルロ＝ポンティはヒューマニストでも反ヒューマニストでもない」と断じているが (p.11)、こうした断定に十分な説得力を与えるには、『ヒューマニズムとテロル』から『シーニュ』の序文にいたる一連の政治的なテキストにおけるヒューマニズムへの態度、ひいては人間へのまなざしの——マキアヴェッリ、モンテーニュ、サルトルらとの関係も相まってけっして単純とは言えない——変遷を跡づける作業が不可欠ではないだろうか。メルロ＝ポンティが人間について語るとき、主要な参照先の一つとしてマルクス（主義）があったことも、忘れがたい事実である。

とはいえ、一冊の研究書としてのバランスを考えれば、以上に述べたことは無い物ねだりにすぎない。メルロ＝ポンティを研究する者にとって、本書は批判の対象であるより前に、目を開かされる洞察に満ちた刺激的な先行研究である。そうでない読者にとっても、「人間とは何か」という哲学的な問いかけを一人の哲学者の著作に即して考察する書物として、十分な読み応えがあると言っていいたいだろう。

付記

本稿は日本学術振興会特別研究員として文部科学省科学研究費（特別研究員奨励費）の交付を受けて行った研究の成果の一部である。

（かわさきただし 臨床哲学・博士後期課程、日本学術振興会特別研究員 DC）